北陸の虫塚

友永　冨
（福井県農業試験場）

稲作のあるところ必らず病害虫あり！　私たちの父祖がこれらに対して如何に対処したか，その文化創造への意識の核を追求することは，歴史を作り歴史に生きる私たちの興味あることというべきであろう。筆者はかかる観点から北陸の虫塚探訪を試み，世の好学者に捧げることとした。

本稿を綴るにあたり調査に協力を仰いだ渋谷捨録・杉田清・常楽武男・守田美典・武田吉三郎・白尾由次郎・髙戸甚右衛門・伊坂実人・杉本達美・山本公志・足立哲・倉矢寛・月田豊・福田忠夫・法水幌・上田五兵衛諸氏の恩恵を多とする。

虫塚の分布と由来

§1　佐渡の昆蟲霊碑　新潟県佐渡郡羽茂町本郷の羽茂中学校の校門を入ってすぐ右手にある。墓銘は昆蟲霊碑と刻まれているが，左側面は大正一四年水稲害蟲黒椿象駆除施行記念，右側面に昭和八年（筆者註＝以下同じ＝1933年）三月羽茂村農会建立，裏面には当時農会長田川寅松，新潟市坂井新三郎刻とある。

佐渡でクロカメムシが初発見されたのは明治23年といわれているが，大正12年から発生が顕著となり13，4年には被害がいっそう激甚となったため，現地に駆除対策本部を設置するとともに，県は害虫駆除施行規則を改正し，クロカメムシを新たに対象害虫に付加した。旧羽茂村では水田飛来時の成虫補殺・採卵の奨励買い上げに全力を注ぎ，大正14年の補殺量9石余採卵数21,7000余卵塊に及んだという。杉田清（私信）によれば県農試髙橋信治が現地に1カ年定住研究に当った結果漸く発見されたのが，石油浸出除虫菊石けん合剤で大正14年羽茂平野200ヘクタールにわたって国・県の補助を得，100台の背負型半自動噴霧機で幼虫期の大規模実用化防除が行なわれた。[1]

このように当時としては，他にあまり例のない防除を行なったため，その労苦を偲びあわせてクロカメムシの霊を慰めるため，記念として建てたといわれ昭和8年に建立したというのは当時亦々クロカメムシが猛威を振るい学童・村民総動員で補殺に当ったからだという。多発年の昭和17，8，28年には碑前で供養を行なったとのこと。

§2　富山の風塚　富山市太郎丸の県農業試験場構内網室前にある。墓銘風塚，裏面に昭和三十一年七月建之）1956年）吉本薬局と記してある。故関谷英夫技師時代から野風の研究に主力を注がれていたが，この間多くの野風が実験に供されたため，これらの風族の霊を慰め鎮めんとの計らいから当時の場長寺田初夫の発議により建立されたと聞いている。

§3　福光の虫堂　富山県砺波郡福光町坂本の農道脇にあり石の祠の中は位牌が納められている。文字が薄れて判読しにくいが表に南無妙法蓮華経須叟聴受縁是功徳○○神その左に……轉身所生鬼子母神，右に轉身得帝釈十羅殺女，裏面には天下泰平国土平穏明……三殺成熟万民○○との書がある。由緒は昔坂本部落一帯はとくに害虫の発生が著しかったためこれを退治した記念の堂だといわる。昭和25年までは，毎年7月6日に日蓮宗法雲寺の僧侶によって供養が行なわれていたという。[3]

設立年次は明白でないが，守田美典によると天和(1615～1621年）のころ石川県砂子坂から移住してきた組頭の成瀬一族が建て，位牌の三殺の語義はツトムシ・ウンカ類・イモチ病をさすのではないかとのことであった。

この外，小矢部市埴生にウンカの虫塚があったことを聞いたが，いまは所在不明。

§4　埴田の虫塚　石川県小松市埴田町のはずれ畑の片隅にある。円柱状の碑文に虫塚と大書しその左に，ア、イカナル故ニヤ当年七月上旬マデハ順気ムルキ。草生ヨク早稲穂ニ出。一統悦ビ昼夜賑ヒ候内。同月中ノ旬コロヨリ俗ニコヌカ虫俄ニ生ジ，ワセオヒオヒカレカ、リ，中稲・晩稲次第ニツヨク，稲多枯何レモ難儀，右虫布モメン袋ヲ以テモリ集メ候分，此所ニ十三俵許埋オク，此末虫生ル時ハ，艸修理ノ頃ハヤク木ノ実油ヲ用ユレバ愁ウスカルベシ，余ハ除蝗録ニ委シ，虫ノ愁ヲ恐レ，後年ノ記録ニ建之畢，天保十年九月[6-14]といまも鮮やかに読みとれる。

§5　岩淵の虫塚　小松市岩淵町白山神社境内にある。始めは同町西光寺址にあったが，いつの代か現在地に移されたという。墓標の形式は埴田のものと類似しており，風化することなく虫塚という墓銘の外につぎの碑文がみられる。[6-14]当年七月中旬頃ヨリ，俄ニ稲株ヨリコヌカ虫多ク生ジ，悉稲ヲ枯ラシ，一統ナンギニ及，布，木綿ノフクロヲ以テトリ集メタル虫，此所ニ拾六俵埋オク，若此ノ末虫生ル時ハ，草修理ノ頃早ク木ノ実油ヲ用ユレバ愁ウスカルベシ，余ハ除蝗録ニ委シ，虫ノ愁ヲオソレ，後年ノ記録ニ建之畢　天保十年九月。

天保10年（1839年）にウンカの大発生があったとき能

美郡徳橋組の当時十村役だった田中三郎右衛門が百姓を指揮して，防除に当り後年このようなことが再びないように欲して補殺したウンカを埴田・岩淵の二カ所に埋めて碑石を建て虫霊を弔らい，後人の戒めともしたのであった。[6-14]

§6 篠原新の実盛塚　石川県加賀市篠原新町附近は源平の古戦場で，斉藤別当実盛はここで戦死したと伝えられ実盛の首洗池・鎧掛け松・実盛塚等の史蹟に富んでいる。実盛塚の墓標中央に南無阿弥陀仏と書し，その右側面に万松院殿覚翁禅門左には寿永二年五月廿一日此処に……とある。[15]

その他実盛の首塚と称するものが，昔江沼郡菩提寺村（現小松市）や鹿島郡徳田村国下（現七尾市）にあった記録が残っているが，[11-12] 虫塚とは無縁のものであり，また，いまは湮滅していて懐古の由もない。

§7 長敏の実盛塚　福井県坂井郡丸岡町長敏の永江用水の水源をなすところに実盛池があり，その傍の老松の下に実盛塚が建っている。墓銘に正瑞院殿覚雄真円大禅定門，左右二行にわたり……二年五月二十一日，その左側面に椎木堂守桓山が文化2年（1805年）に建てたことがかろうじて判読され右側面に於戯忠臣…の文字がみえる。台石は大正11年有志によって修理されたことが明らかになっている。長敏にはなお実盛館跡という地籍に実盛神社がある。鯖江市南井は実盛の出生地として最有力視されており，[2-13] ここにその後裔の第39代斉藤実十郎家が現存し，同家に実盛を祀った祠や五輪塔がある。また三方郡美浜町北田の禅刹泰蔵院境内には実盛の供養塔と称する六重の層塔がある。長敏の実盛池は実盛の産湯の水をとったところと伝わっているが，実盛塚の由来については史実の明らかなものがく一種の追墓と見做される。北田の泰蔵院は実盛の開基によるもので，[15] 供養塔は実盛の生前に部下の霊を慰めるため建てたという。

§8 敦賀天海園の虫供養塔　敦賀市二村町天海園地籍の雑木林（以前は水田）の中にある。墓銘に奉納石経宝塔田虫供養とあり，左側面に八十五翁寛豊焼香若輪透脱入得本郷，右側面に維時享和三癸亥年（1803年）五月と刻し，裏面に施主山田市太夫との書がある。近年改築し最も新しいのが注目される。伝説によると享和のころ此の地の水田に稲の害虫ゲントクムシ(クロカメムシ)が蔓延し，全力を挙げて駆除を試みたがその効なく素封家山田市太夫が困却の余り敦賀の禅刹永建寺住職と謀りこの碑を建てて害虫退散の祈願をこめたところ，害虫何故にか退散したという。[4-7] 墓銘は田虫であるが伝説から今日のクロカメムシであることは明らかである。

§9 敦賀色の虫供養塔　敦賀半島の西端敦賀市色町日蓮宗本隆寺開山堂裏手の墓地中央にある。墓銘に南無妙法蓮華経善徳虫塚，左側面に世話人柴田九郎右衛門法号深心院総修日喜と二行に書かれており，右側面に天保七丙申（1836年）林鐘下浣八日本隆寺嗣法大事院とある。記録によれば，[4] 天保年間田の虫（クロカメムシ）が繁殖し収穫が大いに減じたため柴田九郎衛門がこれを憂いて虫塚を建て虫霊を鎮めるため供養したということである。

§10 栗田の善徳虫塚　小浜市栗田町の通称魔の字にある。碑は自然石で造られ墓銘に諸悪虫蜚交横馳走と二行にしるし，その間に南無妙法蓮華経善徳虫供養右下に国冨谷中とあり。裏面に文政三庚辰年（1820年）春と記されている。[7-16] 古伝によれば文政のころ国冨谷中一円に善徳虫（クロカメムシ）が大発生した。これは村民が旅僧善徳を殺害した祟りであろうとのことで国冨谷中の者が謀ってこの供養碑を建て祟りの去るように祈ったのに始まり，明治初年の大発生にも供養したという。

§11 甲ケ崎の漸得塚　小浜市甲ケ崎町西端雑木林中にある。碑は最近かなり破損し上部三分の一余はかけ落ちているが，[12] 墓銘によれば諸悪蟲蜚交横馳走と二行に分ちがきされ，その中央に南無妙法蓮華経漸得入道之墓とあり，裏面に昭和九壬辰年（1772年）二月廿八日建立漸得虫供養志施主當村中と二行にしるされている。伝承は採集出来なかったが漸得虫は善徳虫に通じ今日のクロカメムシ（俗称ゼントクムシ）をさすもので，栗田の善徳虫塚と同じ超旨に起因していると思われる。

筆者はさきに小浜市次吉町間野鼻（後年魔の字に転化したと思わる）に善徳塚があったことを報じた。[17] これは貞享4年（1687年）のことであるが，いまは附近農民に質しても所在が知れない。建立の由緒は栗田の善徳虫塚と略同様で桑門であった善徳が土人に殺されその霊魂が化して善徳虫となったこと。貞享年間多発したとき国主が補殺を奨励しここに埋めたことが骨子をなしている。

なお，小浜市太郎庄町に斉藤別当実盛の亡魂が化して実盛虫（夜盗虫）となり，野菜に被害が多かったので実盛塚（建設年代不明・五輪塔）に祈禱を籠め村民が厚く信仰していた記録があるが，[19] すでに何らの痕跡も留めていない。

考　　察

以上累述した現存虫塚について若干考察を試みよう。

実盛塚については後述することにして，虫塚の建立年代を考照すると，富山県福光町の虫堂は1615～1621年ころの建立と目され最も古いものであるが確証がない。ついで甲ケ崎の漸得塚（1772年），天海園の虫供養塔(1803年)，栗田の善徳虫塚（1820年），色の虫供養塔（1836年），埴田・岩淵の虫塚（1839年）とつづき，降って佐渡の昆蟲霊碑（1933年），富山の鼠塚（1956年）の順となる。

北陸では福井県下に，わけても敦賀以南の地帯に濃く

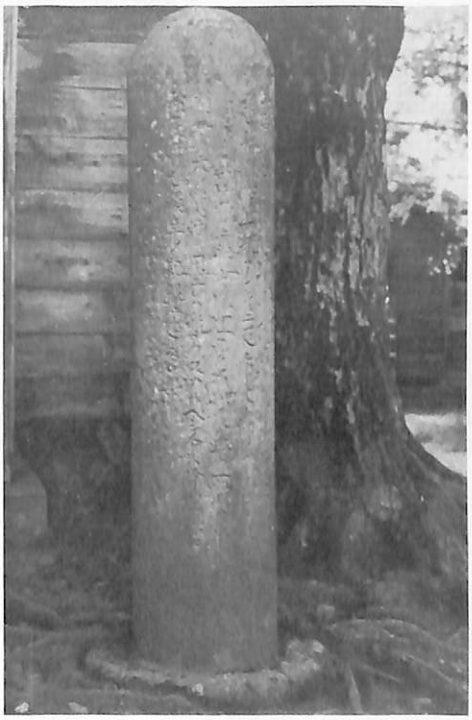
北陸の虫塚（I）

佐渡の昆虫霊碑

富山の鼠塚

福光の虫堂

埴田の虫塚



岩淵の虫塚

（友水原図）

北陸の虫塚（Ⅱ）

敦賀天海園の虫供養塔

敦賀色の虫供養塔

栗田の善徳虫塚

甲ケ崎の漸得塚

（友永原図）

分布している。

対象害虫の種類では，クロカメムシに関するものが5例，ウンカ類2例，蛆1例，その他1例計9例となる。

墓標の形式[5]から分類すると，位牌型石塔（佐渡），打切型墓（富山），笠塔婆（福光），円型墓（埴田・岩淵），香匣型墓（天海園），板碑型墓（色・甲ケ崎），自然石墓（国富）の7種類になろうかと思惟される。

伝説の分類上[16]からは，佐渡の昆蟲霊碑，富山の鼠塚，色・天海園の虫供養塔，栗田の善徳塚や甲ケ崎の漸得塚は宗教的縁起伝説の範囲に入り，福光の虫堂，埴田・岩淵の虫塚は一応説明的伝説の部類とも思えるが，大乗的には宗教的縁起伝説に従属するといえよう。

実盛塚については，太良庄の一例があるのみで，北陸に分布する多くの塚が，害虫と結びついた口碑の少ないこと，実盛の出生地が福井県とされていることと相俣って，実盛塚はすなわち虫塚とはいえないようである。

これらの虫塚起立の因が，科学以前の勧善懲悪的・呪術的形式にも受けとれるが，筆者は栗田の善徳虫塚，甲ケ崎の漸得塚の墓銘[9]にみられる諸悪蟲罪交横馳走の語源が法華経譬喩品に出典を求めていることを知った。すなわち虫は虫なりに生きる権利があるのに，人間が自己本位に勝手に害虫扱いしているにすぎない。そこで我々が生きるためとはいえ殺生することを懺悔し害虫に対する供養を発願したものと意味づけしたい。

摘　　要

北陸地方に分布する虫塚について現存のものはもちろん，文献に収録されたものについても，筆者自らが行脚踏査し父祖の功業を追慕した。調査結果を要約するとつぎのようである。

1）実盛塚は斉藤別当実盛が福井県出身であり，石川県加賀市篠原新町附近で，源平の戦の折戦死したと伝えられているだけにその遺蹟が多いが，害虫に関連した古伝のあるものは，すでに煙滅している太良庄の実盛塚のみであった。

2）実盛塚以外の虫塚は9例あり，建立年代の古く確かなものは福井県小浜市甲ケ崎の漸得塚（1772年）であり，これに敦賀市二村町天海園の虫供養塔（1803年），小浜市栗田町の善徳虫塚（1820年），敦賀市色町の虫供養塔（1836年），石川県小松市の埴田・岩淵町の虫塚（1839年），新潟県佐渡郡羽茂町本郷の昆蟲霊碑（1933年），富山市太郎丸の蛆塚（1956年）がつづく。（福光の虫堂は建設年代不確実）

3）対象害虫別にみると，クロカメムシに関するものが圧倒的で5例（佐渡，敦賀の色・天海園，小浜市栗田・甲ケ崎），ウンカ類2例（石川県小松市埴田・岩淵），蛆1例（富山市），その他1例（富山県福光町）となり，福井県の嶺南地帯に分布が広い。

4）墓標の形式は，位牌型石塔（佐渡），打切型墓（富山），笠塔婆（福光），円型墓（埴田・岩淵），香匣型墓（天海園），板碑型墓（色・甲ケ崎），自然石墓（国富）等がある。

5）伝説類別では，宗教的縁起伝説に包容され日蓮宗との関連性が濃厚である。その思想の底流には，強く仏陀の教えが根ざしているものと考察した。

引用文献

1　安部五一・上田勇五（1956）新潟農試研報7：75～81.　2　福井県女子師範学校（1936）福井県の伝説：338～359.　3　福光町（1956）広報ふくみつ7月号.　4　広瀬栄（1939）敦賀郡市昆虫誌（福井県）：130～142.　5　石橋重吉（1932）若越墓碑めぐり附録墓碑便覧：4～6.　6　石川県（1940）石川県史第3巻：866～867.　7　古賀信義，森野伊作（1926）農及園1(8)：11～12.　8　片上村誌刊行会（1931）片上村誌：323.　9　小林一郎（1935）法華経大講座第3巻：283～291.　10　村上陽三（1957）昆虫25(1)：36.　11　中田邦造（1936）加賀志徴上編巻3：157～158.　12　——（1937）能登志徴上編：342.　13　坂井郡教育会（1912）坂井郡誌：337～359.　14　末永一・中塚憲次（1958）病害虫発生予察特別報告第1号：9.　15　佐久高士（1960）斉藤実盛伝：23～68.　16　敦賀市教育委員会（1956）敦賀市通史：567.　17　友永冨 ROSTRIA 8(2)：1～2.　18　吉井涓一（1901）昆虫世界5：477.　19　——（1902）昆虫世界6：254.